

名著に学ぶ経営 ～ その5：哲学者に学ぶ

大学の専攻を聞かれて「西洋哲学です」と答えると、「仕事とは関係ないですね」と言われる事が多い。しかし私としては哲学こそ経営の基本だと信じている。会社の経営形態は古代の国家の統治に近い。国のあり方は古代より多くの哲学者によって語られてきた。プラトンは良い国家は統治者が哲学者になるか、哲学者が統治者になる事が理想だといっているが、そのまま統治者を経営者に置き換える事もできると思う。プラトンの弟子であるアリストテレスは三つの統治の形態の優劣を述べている。つまり独裁制、貴族制、民主制である。それぞれ僭主制、寡頭制、衆愚政治に陥る可能性がある。しかしその中では民主政治が最善と説く。同じ議論がヘロドトスの「歴史」にも登場する。こちらはダレイオスが独裁制を最良の物とし、自らが王になった時のエピソードである。会社の経営においては規模や発展段階によってどの形態が良いかは変わる。創業間もない時は独裁制を取らざるを得ないし、ある程度の規模になったら取締役会などによって複数のリーダーで行う必要が出てくる。技術、営業、経理などそれぞれのエキスパートが必要となってくるからである。本田宗一郎と藤沢武夫、井深大と森田昭夫といったそれぞれの才能を生かした名コンビで大企業になったケースも多い。さすがに会社の経営における民主制の例はほとんどないが、労働組合や社員会などにおいては有効である。

一方物事の認識においても哲学は一般の人の思考と一線を画す。5W1Hなどはジャーナリズムなどにおいてよく言われることで、経営を考える上でも活用することも出来るが、哲学者の範疇論はより高度な思考形態である。古くはアリストテレスが10範疇として実態、量、質、関係、場所、時間、位置、所有、能動、受動、を挙げている。18世紀のカントは12範疇として、時間、空間、範疇のそれぞれを質、量、関係、様相の面から見る。5W1Hよりもはるかに多面的である。私も頭の中にこの思考回路が出来上がっていて、経営判断をする際に必ずそれぞれに照らし合わせる。

さらにカントに続くヘーゲルも認識において主体、客体、関係からなるとしている。また有名な弁証法においてテーゼ（正）、アンチテーゼ（反）、ジンテーゼ（合）といった思考を行う。孫子にも組み込まれているこの思考形態は物事を両面から見、また変化を織り込んでの認識であるから、どの場所、どの時間においても有効な物となる。

それからまた私の思考の中に刷り込まれているのは、20世紀の哲学者であるサルトルの「人間とは自ら作るところのものである」ということである。これを会社に置き換えると、「会社とは自ら作るところのものである」となる。中小企業だからどうだとか、製造業だからどうだといったことではなく、みずから望むものを、プランを立てて実現する。今ある大企業の多くも中小企業から出発している。このような考え方こそビジネスを成功させていく鍵であると思う。